No. 2　　1983年11月1日

ARPA・K NEWS LETTER

地域計画・建築研究所

大学先行の都市造り，1000年を経た現在の町並 －ケンブリッジ－（本文6ページ）

もくじ

・職能論としてのプランナー・コンサルタント・コーディネーター…… 2
・きんきょう　○ヨーロッパの学研都市①…… 6
　○「和歌山下津港振興開発シンポジウム」の企画に参加して…… 8
　○名古屋勤務とパチンコ…… 9
・旧刊新刊書評○「若き数学者のアメリカ」…… 10
・まちかど　○足のむきやすい店－相生駅前－…… 11
・一知半解　○見直し議論が出だした水需要…… 12

職能論としての
プランナー・コンサルタント・コーディネーター

糸乗貞喜

１０年ほど前には、わが事務所内でも「プランナーとは何か」とか「コンサルタントはいかにあるべきか」などという職能論が割合いに盛んであった。

アルパックがスタートしてもう１７～８年たったことになるが（スタートは昭和４１年会社にしたのが４２年）、創立の頃はこんな仕事が安定した職業として成立つなどとは、わがメンバーは誰１人として思っていず、半ば道楽と心中するような気持をもっていた。

その頃われわれが、親・兄弟や友人に会ったとき一番困ったのは、自分が毎日どんな仕事をしているかについて説明し納得させることができないということであった。一応やっている仕事の説明はしえても、それが職業になることはなかなかわかってもらえなかった。それも当然のことであって、その頃も（今も）一般社会の就業時間という概念などに当てはめると、他人には言えないような報酬しか当らなかった。

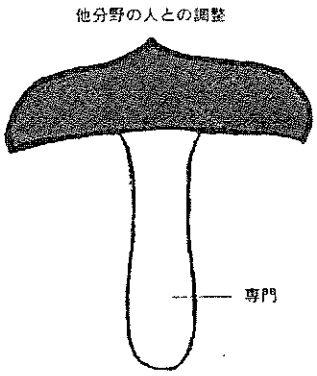
今でも新しく所員が入ってくると、私などは新しい所員をつかまえて、「建築設計の仕事が今ではほぼ社会的に認知されているように思うが、ここまで来るのに70～80年かかったことになる。これからあなたがやろうとしているプランナーやコンサルタントという仕事はまだ始まって１５～２０年しかならない職業です。したがってあなたはこの仕事を続けるかぎり一生パイオニアのままで、自分の職業が社会的に十分認められる時期なしに終るかもしれないですよ、それが心配なら今のうちに他の職業についた方がよい。」などといっていやがられている。

昼と夜の区別のないような生活をしながらも、新しい分野の仕事をしているという気概をもつことによって、仕事は十分に楽しく、未来を考える仕事ということが、現実の個人の日常生活（時間と経済）に対して阿片の役割を果したようであった。

キノコ型論

こんな状況のときに、事務所内の職能論に一区切をつける意味で、京大の西山先生に来ていただき、プランナーやコンサルタントの将来性や、この職業についた人間の心構えなど話していただき討論した。その時の西山先生の研究者やジャーナリストと対比しながらの話が印象に残っている（この話は印刷物となっている）。研究者は研究対象が具体化できるのかどうかや直接の実益があるかどうかは考えないし、新聞記者は問題と一般の社会人との連絡係である。しかしプランナーはそのどちらでもないし、どちらにも似ている。つまり一般の社会の人たちに問題を知らせたり解決方法を研究したりもしながら、確実な解決方法を見つけ、それを押し進めなければならない……というような話だったと思う。

これらの議論を通して「キノコ型論」が定着した。キノコは傘と柄から成っているが、傘は横の拡がりを意味し、柄の部分は専門的能力の柱を示した。まとめると「何かの分野で専門的能力をもち、あらゆる分野の人たち



から知恵を借り生かしてゆく理解力や応用力を身につけていること」ということになった。それから１０年余がたったが、「キノコ型論」は定着しても、「キノコ型人間」「キノコ型プランナー」が定着したかどうかは全く自信がない。

職業の将来と企業としての将来

１０年たってまた最近職能論が盛んになってきているように思う。今年の８月頃、今後の産業や職業についてのテレビ討論会を聞いていたら「まちづくりなどのコンサルタントの仕事は、職業としては成長率が高く極めて有望な分野であるが、個別企業の様子を見ると、いずれも極めて零細で不安定で、常に危険な状態にある」と、ある有名な人が述べたのを聞いて唖然とした。この指摘は正確そのもので、前段だけ聞いていると前途洋々たるものであるが、われわれ１人ひとりにとって見ると、後段の方に現実的響きが強い。

過去１０年間の成長率は正に目ざましく、われわれの周囲を見わたしても、事務所数も従業者も大成長している。ところがこの５年ぐらいは仕事数も単価も全く増えていないような気さえする。それに加えて支払い条件は悪くなる一方で、われわれのような「肉体労働者」に対して一括完成払いというのが普通のように見られるようになった。以前には３分の１は着手時もしくは着手後まもなく支払われるのが普通であった。この１０年間に職業としては大成長したのかもしれないが、個々の零細企業の財務内容は成長していると思えないから、いよいよ大変になってきている。

１０年前も環境がきびしかったときに職能論が出ていたから、今それが出てくるのも経営環境のきびしさを反映しているのかもしれない。

きびしくなった計画の中味

きびしくなったのは経営環境ばかりでなく、計画というものに対する考え方についてもいえる。

「計画をつくるのか、計画書をつくるのか」ということが何度もいわれてきている。「列島改造」華やかな頃は、自治体にも何となく事業を行なう予算があり、民間の投資も活発であったから、賑やかな絵＝計画書があればよかった。今ではそうはいかない。

「計画」という言葉の意味さえもこの数年間にちがってきている。以前は「ある理念を絵にし、数字にしたもの」あるいは「ある特定の個人の考え方の具体化目論書」という性格が強かった。「私はこうしてみたい」といった希望の表現でさえも計画とされていた。

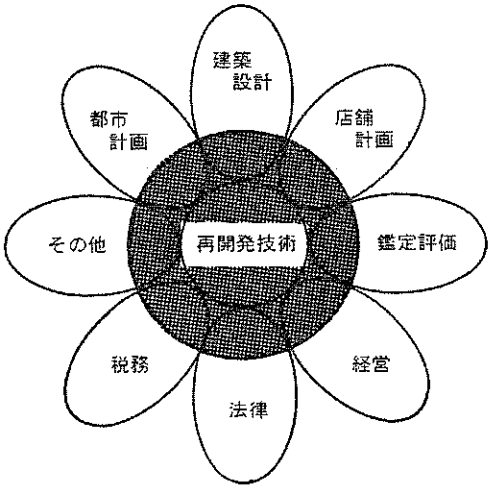
環境の変化に対応して「計画」の位置づけも変化し、単に目標を書くだけでなく、手段も効果も明らかにしなければならなくなってきている。今や計画は願望ではなく事業化を前提とし、さらに関係地域や関係者のコンセンサスさえも含まれるようになった。したが

ってプランニング（計画をして組み立てる）だけでなく、コンサルティング（問題に答える）だけでもなく、コーディネイト（調整し進行させる）することも期待されている。誠に状況はきびしく、われわれは一層窮地に立たされているわけである。

カンと見通し

都市再開発事業の計画・推進・調整業務をしている事務所などが、任意団体の「再開発コーディネーター協議会」をつくって再開発事業の推進をめざしている。それを任意団体から公益法人としての社団法人化を目ざす中で、「コーディネーターとは何か」が改めて問われ、協議会の中で、あるいは認可官庁となる建設省との間でも議論されている。

この動きの中で、協議会でもコーディネーターの経験者を調べたら３７０人ぐらいの人々がいることがわかった。しかし再開発事業のかかわり方の幅や密度については千差万別である。コーディネイターとして認知しうる程度とはどれくらいなのかの判定は極めてむずかしい、判定以前に役割の定義をしなければならない。



協議会では別図のような概念図で示している。この花の形の中央部分がコーディネイト業務を示し、外へはみ出している部分は専門分野で、前記のキノコによく似ている。つまりコーディネイト部分は傘であり、柄が専門分野を示している。しかし割切って考えるとキノコの傘だけとか、花の芯の部分がコーディネーターの機能であり、おいおいそれだけを業務にする人たちが増えつつある。

結局、今後われわれが最も期待されているものは……あるいは最も身につけなければならないものは何であろうか。街づくりの仕事には初期の基礎調査から事業計画、資金計画、そして推進調整業務までの幅があるが、もし計画の実現性に重点をおけば、計画のままで終ってしまうのはムダだったことになってしまう。再開発事業の場合には、対象地区に調査に入り計画をたてるとなると、かなりな波紋が起ることになり、地元の人たちも少なからざる影響を受けることが多い。できれば、調査・計画対象にするかどうかについての「カンと見通し」を持っている人がいると能率もよく有難いということがいえよう。もちろんある限定した調査企画を少ない費用で行ってそれによって事業のフィージビリティスタディとし、それ以後の調査や計画をあきらめるということになったら、それはそれで以後の無駄な出費を節約したことになり極めて有効な調査計画と位置づけられる。

コーディネーターと弁護士

この問題についてのコーディネーター協議会での討議では、弁護士の立場と似ているのではないかという話が出た。「弁護士さんは仕事として引受けるときは、一応勝目があるかどうかを考えて判断するのではないか……」

ということである。弁護の効果がなかったときでも十分な（規定の）フィーがもらえているのであろうか。

われわれも調査・計画の当初に一応の終りまでを見通すカンを身につけたいものだ。

また医者の立場を比較してみるのも面白い。医者は直るかどうかについては別として十分誠意をもって治療に当るという態度であって、直すという約束はしないし、直らなかったといって医療費を値切るということもないのではなかろうか。

バッテルというアメリカのシンクタンクのことを書いた本があった。その中で契約研究というシステムがこのシンクタンクの成長に果した役割にふれている。大意は「バッテルは成功を約束したわけではなかった。誠意をつくして努力することを約束しただけであった。そして成否はともかく、クライアントを失望させたことはなかった。」というようなことが書かれていた。

きびしい情況の中でますますわれわれの仕事がためされている。職能を社会的に確立するために多くの人たちと議論を進めたいと思う。御意見を伺いたいと思いますのでよろしくお願いします。

〈追書〉

１０月２４日に「地方シンクタンク会議」があった。

主催はＮＩＲＡ（総合研究開発機構）で冒頭に下河辺理事長があいさつされた。その中でシンクタンクのメンバーの資質にふれて「シンクタンクは頭が悪くていいんですよ、知識に貪欲で、がんばりのきく体力があれば……。専門の知識もいらない、それは研究者がやれば……」というようなことを云われた。

この書きぬきはかなり不正確だが、感じはこんなものだったと思う。

このとき思い出したのは再開発コーディネーター協議会での議論であった。コーディネーターに向いている資質の話の中で「コーディネーターの前職は中小の工務店（建設会社）の番頭さん（現場監督）がいいですよ。彼らの今やっているのはまさにコーディネーションで、自分では手を動かさずに頭を使って段取を考えて、いろいろな職方と材料を動かして建物を建てていく。周辺の関係者との接待も経験しているし、再開発のコーディネーターにピッタリです。」ということが出ていた。

この２ツの話は感じとしては割合似ていると思った。

（いとのりさだよし　専務取締役）

ヨーロッパの学研都市①

学研都市の原型ケンブリッジ

霜　田　　稔

ロンドンより70㎞、列車で1時間10分のところにケンブリッジがある。

駅を降りて、西口の広場に立つと、そこは、バスが1台、タクシーが2、3台といった静かな郊外都市の駅前広場であった。町の中心が、大学街にあるため、人口6万～7万の町としては、駅前は静かなたたずまいをみせている。

駅より大学の中心に至る約1.5㎞の、この町を南北につらぬくリージェント道路の両側は、ほとんどの建物が2、3階建であるが、ところどころに、本屋、下宿仲介、コピーサービスに混って、小さな民間の研究所らしき建物があり、すでに何かアカデミックな雰囲気をかもし出している。また、学生には車の使用が禁じられているからであろうか、車がたいへん少く、自転車の交通量が多い。

町の中心に向うにつれて、歴史的建造物が増えてゆく。19世紀のイギリスの工業化の中で、ケンブリッジも小麦粉工場を始めとして工業化が進み、20世紀にはいると、セメント、電気、そして科学機器等の工場が設立された。そして、都心をかたちづくる「大学街」から放射状に住宅地がゆるやかに拡大して今日に至っている。したがって、全体的にみると、歴史は古いが、以外と郊外は新しい。

また、大学も750年の歴史を持つものから、19世紀、20世紀、あるいはまた10年の歴史もないものまであり、古き修道院の雰囲気を持った大学街の歴史を基調としつつ、近年の科学技術の先端的な部分をも含んだ新旧のコンプレックスともいえよう。

都心

ケンブリッジ大学は、約30位あると考えられる準独立した財を持ち、全寮制を基本とする単科大学（College）と、それらを有機的に統合した大学（University）のコンプレックスであり、また、大学に直属した研究所、及び学部がたくさんある。学生数は、単科大学（College）1校当り400人平均で、全体で12,000～15,000人、その内、大学院生（Graduate）が、約4,000人とのことであり、特に近年は、大学院生の増加が目立ってきているとのことであった。

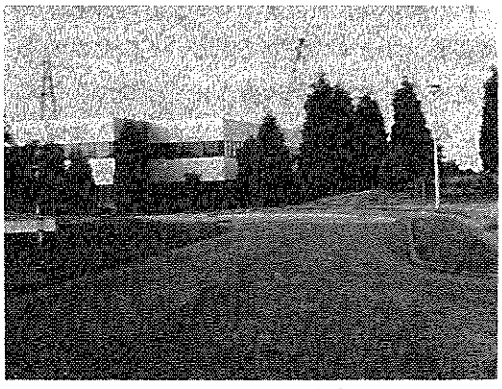
19世紀には、オーストラリア等の遠隔地への布教士の養成と、女性の高等教育への対応のために大学が数多く設立された。20世紀では、科学技術を主とする大学、学部が創立されている。特に近年の特徴として、高度に蓄積された科学技術と結びついて、民間及び国公立の研究所が、建設されてきている。最も典型的な例が、ケンブリッジの市街地の縁辺部に最近設立されたサイエンスパークであろう。

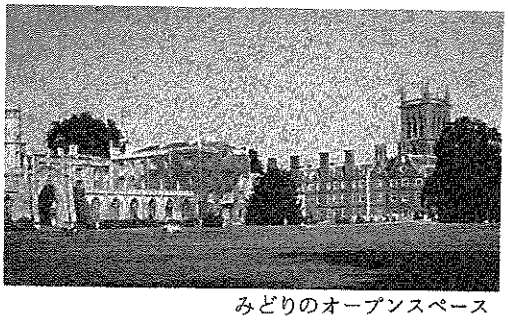
ここでは、平屋の連棟式貸研究所団地（20～30社）が作られている。このテナントは、主に企業化以前の領域での技術開発企業で、大学のノウハウ、機能、環境とフルに結びついた小規模な端緒的な企業であった。これは、従来の大学の科学技術活動をマーケットとする企業と異り、また、我国のように大手企業からのスピンオフではなく、大学からのスピンオフ企業というべき注目すべき現象である。

さて、都市としてのケンブリッジの魅力は何か。

第一に、全寮制の厳しい修道院をしのばせる大学の建物と、大学町特有の本屋、美術店、さらに一般商店とが混然一体となって都心を形成し、厳しさとゆとりの濃密な歴史的コンプレックスを作り出していることであろうか。

第二に、都心部をとりまき、街の中に点在するみどりのオープンスペースである。このみどりのオープンスペースは、各単科大学（College）所有とか、クリケット等の各スポーツクラブ所有の形態が多く、通常の都市公園は意外と少い。ケンブリッジの都心部の約30%近くがこのようなみどりのオープンスペースで占められ、この景観を借景として歴史的建造物が積み上げられている。


サイエンスパーク


みどりのオープンスペース

そして第三に、歴史的建造物とみどりのオープンスペースにマッチした水準の高い近代建築等のデザインが見られることである。これらは近代的な商店街やキャンパスを提供している。

このように、町も大学も決して古いだけではなく、今日も時代に対応してゆっくりと変化してきている。

（しもだみのる　常務取締役）

「和歌山下津港振興開発シンポジウム」の企画に参加して

金　井　萬　造

和歌山下津港振興開発シンポジウムがこの8月9日に和歌山商工会議所で開かれました。

財団法人・和歌山社会経済研究所を中心に約半年前から準備してきたもので、私達は港湾計画調査を和歌山県と財団から委託されて調査を進めてきたこともあって、企画に参加しシンポジウムに取組みました。

企画のきっかけは、他港湾で港湾のＰＲと振興に取組まれている背景を把握しつつ、調査の過程で荷主や背後企業に港湾の実情があまり知られていないこと、港湾を利用したが背後道路等に問題があることがわかったからです。又、港湾計画作業でも、需要に対応した施設（空間）計画から需要を創り出すためのソフト、ハードの環境条件を整備した空間計画が必要になっていること、計画とは、事業化、施設整備後の利用の具体化まで結びついたものにしていくことが重要だと考えたからです。

シンポジウムでは、「地域からみた和歌山下津港への期待」（宮本先生）、「和歌山下津港整備の課題」（長尾先生）、「港湾振興システムと体制づくり」（今野先生）、の講演と話題提供を受けて、港湾関係者によるパネルディスカッションを行ない、港湾振興のための問題提起と今後の方向を抽出しました。約180名の参加のもとに第一回シンポジウムは成功裏に終わりました。

シンポジウムの結果は、財団の機関紙に掲載されると思いますので省略しますが、パネルディスカッションで出された主な問題点は、背後の幹線交通体系とのセッティング、港湾のイメージをあげるためのポートサービス、集荷対策の進め方などです。

今後の取組みとしては、今回の港湾振興を受けて、港湾空間は都市の臨海空間であることから「港湾空間と都市活動・市民生活」、「港湾空間と産業活動」などのテーマを考えています。

シンポジウムに取組む過程で勉強したことは、関係者に御案内を出すなかで、リストアップした方々をみると港湾利用促進に今後関係される人々が非常に多く、日常的な連携を大切にしていくこと、パネルディスカッションの準備で各関係団体の会議に参加させていただいて立場別の具体的課題を把握し、港湾計画作業に生きた情報として活用できたこと、港湾振興への関係者の期待が大きく、振興のための組織づくりなどソフトな対応を着実に仕込んでいけば、将来の港湾振興につながる可能性をもっていることであり、私にとって大きな収穫でした。

私の願いは、言うまでもなく、日常的な港湾振興システムの確立であり、そのための関係者による日常的研究会という体制づくりです。今後は、官民の適正な協力による地域振興が必要な時代に入ってきていると思います。

和歌山下津港が流通港湾・産業港湾・レクリエーション空間として地域社会に役割を発揮することを望んでいます。

（かないまんぞう　取締役大阪事務所長）

名古屋勤務とパチンコ

――「路地裏の経済学」竹内宏著　新潮文庫を読んで ――

内　村　雄　二

8月27日に名古屋に引越し、当日より名古屋市西区の住民となった。京都に長年住んでいたせいか、名古屋に来てまず感じることは、周辺に山が無いことである。遠景に写る山の姿はかすみ、紫色に見えており、改めて濃尾平野の広さを知るのである。

私の名古屋に関するイメージは、きしめんと尾張名古屋城そしてパチンコであるが、特にパチンコといえば名古屋というきまり言葉は、何故か小学生の頃から知っていた。

そこで、名古屋に転勤になったついでに――かなりのこじつけであるが――パチンコについて若干触れてみたい。というのは、今年の所内研修会で糸乗が、「路地裏の経済学」(竹内宏著）という本を紹介したが、その中に〝パチンコ商法の秘密〟という章があり、私も読んでみてなかなかおもしろかったからである。

以下、パチンコの現況と歴史等について、本文から要約してみる。

現在、全国のパチンコ店数は約1万軒で人口65人当り一台の割合になり、成人男子では20人当たり一台という普及率で、パチンコ王国の愛知県では15人に一台である。

パチンコ等の売上額は、年間約1兆5000億円で、日本の防衛費の半分、海外直接援助費の4倍であり、小売等としてみたときでは、アパレル産業界の売り上げに匹敵している。

また、景品のセブンスターやハイライトはその全売上高の20％近くが、チョコレートでは10％近くが、それぞれパチンコ店を通じて販売されている。

パチンコの始まりは、コリントゲームであり、大正末期にコリントゲームは大阪で改良されてパチンコに変わった。そして、間もなく名古屋に伝播して、急激に発展し、第2次大戦前には300～400の露店商や小型店がパチンコを営業したが、戦時経済体制に入り不用不急産業として、昭和17年に全業者が転廃業した。

戦後、パチンコを復活させたのは、名古屋の華橋であり、兵器用ベアリングを転用して、戦前の子供用パチンコを大人用に転換させた。その後、6～7年間でパチンコ業は大レジャー産業となった。

ここまで読んでみて、ひとつの疑問をもつ、つまり、何故、名古屋でパチンコが生まれ、発展したのであろうか？　大正末期も第2次大戦後も共に名古屋で急激な発展を遂げているのは非常に興味をひく。

パチンコに限らず水商売産業は、常にユニークなアイデア（創造）を要求される。パチンコを発案したのは、名古屋の華橋であった。そういう意味でまず考えられるのは、当時、優能で商売上手な華橋が、パチンコ造りのにないてになっていたのだろう。うまいことに兵器用ベアリングも手軽に入手でき、当時レジャーのなかった人々をパチンコにかき集めた。逆に、パチンコはそれだけの魅力をもっていた。

竹内氏によれば、パチンコは、ゲームでは

なく、真険さが加わった勝負であり、生き物のように台の1つ1つが個性をもっているから、パチンカーは、その日の成果を「勝った」「負けた」と表現するらしい。つまり、台自体の持つ物理的な変化（台は合板で作られており、温度や湿度でバイメタル的な変化をする）やクギ師のさいくに挑戦するのである。

このようなことは、パチンコが、日本的レジャーの本質をもっていることを示すものであるらしい、なるほど、パチンコが西洋にいってもクギ師が育たず流行しないらしいが、逆にスロットマシーンは、日本では人気がないのはおもしろい。

名古屋にパチンコが立地したのはおそらくパチンコ製造のための人材、材料物資、愛好者（パチンカー）と三つの点で、他都市をぬきんでていたのであろう。

戦後の動乱の中において、底辺から冷静に世の中を見ていたのは日本人でなく、華橋であったことが、また、パチンコの原料は兵器用ベアリングであり、それを愛好したのが日本人であったことが、おもしろく、はがゆい気がする。

しかし、現在に至るまでのパチンコ台は、日本のブルーカラー的技能者の絶えまない努力によって開発されたものであり、今日では電子化し、高付加価値化されている。

パチンコも日本の高技術化の流れをまさに、代表していたものであったといえよう。

（うちむらゆうじ　名古屋事務所）

旧刊新刊書評

「若き数学者のアメリカ」

藤原正彦著　新潮文庫

1972年から1975年まで、おそらく渡米時は20代であったと思われる著者が、はじめは留学生として、ついで大学の数学の助教授として体験したアメリカが語られている。

「絶望的なさみしさと限りないあたたかさと、それをつなぐ愛を綴ったエッセイ」といういい方は少しキザではあるが、今日もう一度読みなおしてみた感じである。

ラスベガスで持金のほとんど（350ドル）をすってしまい、ミシガンについてから心細い日々を過したこと、そこでの絶望的なさみしさ、それを逃れるためにフロリダへ行ったことなど孤独なアメリカ、親切なアメリカ人が書かれている。

後半のコロラド大学での助教授としての学生との交歓や、ストリーキングフィーバーの中での「1人こっそりのストリーキング体験、また住居の周辺の子供達とのあたたかい交流なども楽しい。ぜひ一読をおすすめする。

ついでにつけ加えると、この本の書かれている時期は上記の通りであるが、新潮社で出版されたのは昭和52年で、日本エッセイストクラブ賞を受けた。文庫に入ったのは昭和56年である。定価は280円。

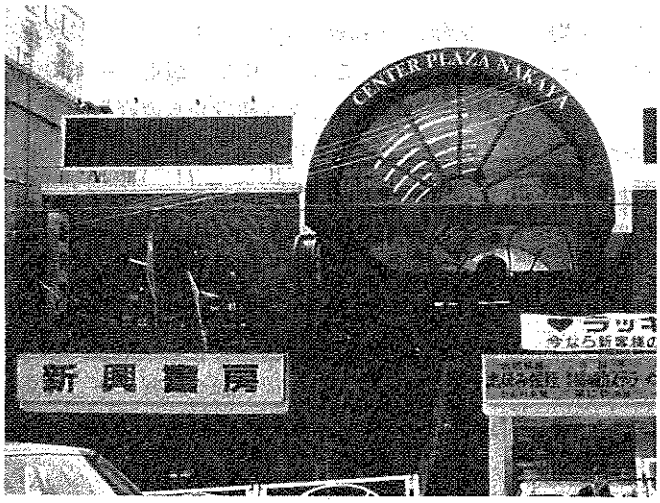
（いとのりさだよし）

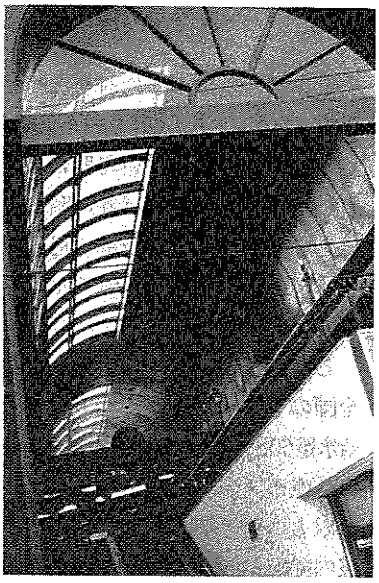
まちかど

足の向きやすい店

－相生駅前－

小阪昌裕





はじめてこの駅に降りたった時、自然と足が向いてしまったお店がありました。

というのは、〝自動昇階段？〟がそのお店に向いていてくれたからです。それに乗りながら、ふと見あげるとドーム状の天井ごしに青空が見られ、なかなか明るいムード……。天井の壁の一部には鏡もあしらわれ、小じんまりとしながらも結構奥ゆきのある空間なのです。

２階には、正面の小ぎれいな本屋さんをはじめ、アクセサリー、小物屋さんや美容室、１階には、相生らしい漬物等の土産物屋さんや喫茶店が並ぶ。表にまわってよく全体を見てみると、半円を強調したファサード（表玄関）レンガタイル・鉄・ガラスの材質の調和……ちょっといかした趣をもっている。

このお店、いわば〝駅前待合館〟のようなもの。ここで考えさせられたことは、〝まちかどのオシャレとは、そのまちらしい親しみとちょっとしたアイデアの表現が必要なのでは……〟ということです。ここでは本屋さんのような、みんなが気軽にはいれるお店があるのがよかった。

（こさかまさひろ　大阪事務所）

編集後記

とにかくこれで３回、２ケ月おきに出すことができました。今までは所員の原稿だけでやってきましたが、今後は所外の方の御協力も得たいと考えています。また所内ゼミでの面白い話なども記事にしていきたいと思っています。来年もがんばります。どうぞよろしく。　（いとのり）

一知半解

見直し議論が出だした水需要

重本幸彦

上水道の給水人口に対する給水量は、全国平均でみると1人1日平均給水量が約360ℓ/日・人、夏季など水需要の多い時期の1人1日最大給水量が約470ℓ/日・人（共に昭和54年、表1参照）となっている。一応、目安として、平均量で350ℓ/日・人、最大量で500ℓ/日・人といわれてきた。

しかし、これらの給水量には地域差があり、全国の主要大都市間でも大阪市（1人1日平均給水量608ℓ/日・人、同最大給水量770ℓ/日・人）と札幌市（300ℓ/日・人、339ℓ/日・人）とでは2倍以上の開きがある。京都府などひとつの地域内でも、同種の傾向がみられる（表1）。こうした大きな差が生じるのは、下水道普及率など生活水準の問題とともに、夜間人口に基づく給水人口に対し、昼間人口の多少や事業所などの都市活動の度合が影響しており、場合によっては老朽管に起因する漏水率や地下水が豊富な町では井戸利用が多いことなどが影響している。

かつては年々増加していた給水量もオイルショック以降伸びていない。例えば、1人1日最大給水量は、全国平均で381ℓ/日・人（昭和40年）→451ℓ/日・人（45年）→480ℓ/日・人（50年）→469ℓ/日・人（54年）と近年は安定傾向にある。こうした中で、最近、従来の予測量の見直しや、ダム建設や水道経営問題などを含めて新しい角度から水需要問題が議論されている。

また、水道施設は最大量に合わせて考えざるをえないので、その適正化のために、年間を通じての給水量の平均化、つまり、夏季のピーク・カット対策が重要と思われる。

水需要について、地域特性に根ざしたきめ細い対応がより一層求められる時代になりつつあるようだ。

（しげもとさちひこ　大阪事務所）

表1　上水の1人1日給水量（最大、平均）の地域差

	区分	最高値	最低値	平均値
（昭和54年）全国主要大都市	1人1日平均給水量	608ℓ/日・人（大阪市）	300ℓ/日・人（札幌市）	364ℓ/日・人（全国平均）
	1人1日最大給水量	770ℓ/日・人（同上）	339ℓ/日・人（同上）	469ℓ/日・人（同上）
（昭和56年）京都府	1人1日平均給水量	433ℓ/日・人（京都市）	146ℓ/日・人（八木町）	－
	1人1日最大給水量	619ℓ/日・人（岩滝町）	250ℓ/日・人（同上）	－

（「京都府統計書」，「水資源便覧」国土庁資源局）

ARPA・K ㈱地域計画・建築研究所

ARCHITECTS, REGIONAL PLANNERS & ASSOCIATES, KYOTO

本社 京都事務所 〒600 京都市下京区四条通り高倉西入ル立売西町82 TEL（075）221－5132(代)（大和銀行京都ビル8階）

大阪事務所 〒540 大阪市東区石町1丁目1番地 TEL（06）942－5732(代)（天満橋千代田ビル2号館）

名古屋事務所 〒460 名古屋市中区丸の内3丁目18番30号 TEL（052）962－1224（ツボウチビル6階）

九州事務所 〒810 福岡市博多区中洲中島町3-3 児島ビル3階 TEL（092）281－2349